

## わが領土あるいは成就されなかった創世記

— Espace/Terrain の意味作用について —

広 川 忍

《中心と不在の間》<sup>(1)</sup>に流調された詩人にとって、人生は、世界から自己の〈場〉を奪取する激烈な闘争となる。《不在》に支えられ、《空虚》に養われた存在の《真の基盤》(中心)を搜索する苦渋に満ちた走行となる。

闘いながら探索する、これが、メスカリンとの対決を経て今日に至るミシヨ一の走行の、いわば、基本的流儀である。この自己内面の踏査旅行は、『エクアドル』のミシヨ一が自らの存在の与件として感得した《胸にあいた小さな穴》<sup>(2)</sup>、《空虚》の認識を起点としている。

『わが領土』は、この自己認識から出発して、自己内面の探索に一步を踏み出した、ミシヨ一の最初の実践の

書である。ミシヨ一は、病める存在として弱者の側に立ち、《無力の想像力》を唯一の武器として、健康人、強者の論理の上に成り立つ現実秩序に果敢に挑みかかる。

自らをデミウルゴスと認め、困難な世界創造の試みに着手する。『わが領土』において、ミシヨ一は始めて、自らが詩人であることの必然性を自覚したと言えるだろう。

本小論では、「わが領土」に戻ったミシヨ一の困難な状況を明示した上で、著作集の表題テキストを espace terrain の関係のうちで捉え直し、新たな照明のもとで、Espace の詩人ミシヨ一の特質とこの作品のもつ深い意義を明らかにしたいと思う。

I

「わが領土」に戻ったミシヨールが至る所に見出したものは、稀薄な現実であった。

(1) わが領土ではすべてが平らだ。何一つ動くものがない。それに此処其処に形はあるのだが、光は一体何処から来るのだろう。まったく影がない。(I)

所有 (avoir) なき存在 (être) は空洞化する。「わが領土」とは《空虚》の別名なのである。すべては実体を失い、形骸化している。恰かも一切の所有がア・プリオリに禁じられているかのように、すべてを一から作り直さなくてはならない。

(2) そして歯のために、顎を一つ、消化と分泌の器官を一つ用意する場合、私はすぐにそれをきちんとかみ込んでやる。脾臓と肝臓を据える段になると(というのは、私はいつも順序立てて仕事をやるから)、歯どもが出て行き、やがて顎も、次には肝臓も居なくなってしまう。肛門迄来ると、もう肛門しかないのだ。それには私もうんざりする。(VII)

この人体解剖を思わせる叙述は、ミシヨールの人間創造

の一コマである。成就されなかった『創世記』、それが

「我が領土」の〈特性〉(Propriétés)なのだ。この人体製作の空しい企ては、自己の再創造の幻影を与えるが、一切の意味を失い、有用性を剥ぎ取られたオブジェの残骸(存在の破片)から世界を再構築する試み<sup>(3)</sup>でもある。

無からの創造が、神なきあとの詩人に課せられた使命であるとすれば、faire quelque chose de rien (V) 無から何かを作る(つまらぬものを何ものかにする)必要性が、ミシヨールをはからずも詩人にしたと言える。

テクスト前半部(I—XI)では、所有に対する欲求が、創造の度重なる挫折と共に、悪しき夢のように描かれ、ミシヨールが《生きるべく運命付けられている》(V) 領土の貧困が強調される。

(3) 唾棄すべきわが領土の有様は相当なもので、一瞬外に目を向けたり、呼び出されたりして、戻って来ると、もう何もないか、あるいは少しばかりの灰の層が残っているだけといった按配なのだ。(IV)

(4) わが領土ではいつも完璧にすべてが欠けている。例外的に一つの生きもの(存在)、あるいは一連の生きもの(存在)がいることはいるのだが、それと

でも全体の貧しさを際立たせるだけである。(IX)

(5) 遊星上で完全に迷い子になって、私は涙を流す。

何ものでもないが、それでもやはり親しげな地所の

感じを与えてくれるわが領土、至る所で見出すあの

不条理の印象を与えないわが領土を懐しんで。(XI)

この《唾棄すべき領土》が、たとえ無に等しい衰れな

ものであっても、そこに生涯服役しなければならぬ

(condamné à vie) (V) 以上、何とかしなければならぬ

らない。さもなければ、存在は還るべき住みかを失い、

常に《遊星》上に放逐される危険に曝されるであろう。

内部は外部に、《空虚》は虚無に呑み込まれてしまいう

ろう。それが《何ものでもない》、嫌悪の情さえそそ

《領土》だとしても、現実世界の至るところで見られる

《不条理の印象》を与えない、《親しげな地所》の様子

はしているのだ。

この《領土》の稀に見る貧しさは、一切の所有を剝奪

された詩人の生の条件を映し出している。内部世界は、

外部世界の《不条理》、すなわち何ものも与えないどこ

るか、ただ敵意のみを押しつけてくる世界の拒絶の意志

の支配下にある。それは、詩人が世界を拒否したからで

あり、自分の領土に家を建てようとしているからだ。こ  
の拒絶―拒否の不毛な抗争、《場》なき戦いが、すべて  
の創造を挫折に導くのである。

Celui qui n'accepte pas ce monde n'y bâtit pas  
de maison.<sup>(9)</sup>

この世界を受諾しないものは、そこに家など建ては  
しない。

内部世界を住みうる場にするのが、飽くことなきあの  
空しい創造行為の、《領土》の開拓の直接的な目的なの  
である。

「わが領土」では、《地所》(《土台》)の探求が、住み  
うる世界の建設に可能性を開く転回点の役を果している。  
terrain という語が始めて文中に現われるのは、先に一  
部を引用した、《外部の女性》に幻惑され、領土を脱け  
出た《私》が、《無数の快楽》のあとの幻滅と疲労のな  
かで、《遊星》上にひとり放り出され、《わが領土》を懐  
しむ条り(XI)である。この語の出現を境に、領土の貧  
しさと、創造の企図と挫折の繰返しに特徴付けられる前  
半部の絶望的なトーンは、次第に明るさを増し、《地所》  
の探求(《わが地所を求めて》)―《地所》の発見―創造

の挫折の理由開陳―建設の希望へと展開して行く。本テクストではこの terrain という語が、ディスクールの開の上からも、『わが領土』の詩人の特質を知る上でも、鍵語となるのである。

(6) 私はわが地所を求めて数週間を過す、辱しめられ、ひとりぼっちで。こんな時になら、誰だって好きなように私を罵ることが出来る。

私が自分を支えられるのも、わが地所を見出せないわけがないというあの確信があるからだ。(XII)

文脈の上では、この《地所》の探求は、『わが領土』から《遊星》上に放逐された〈私〉の祖国への帰還の旅である。しかし、mes propriétés = mon terrain の表面上の論理の整合性を引裂くように、この《地所》の探求には重要な意味が隠されている。ここでは、『地所』は《領土》の最も重要な要素であり、場であることを前提に、この探求の意味を指摘するに留めよう。

この《地所》の探求は、『エクアドル』の《私は不在の支柱の上に自らをうち立てた》<sup>(6)</sup>という不在に依拠した自己存在に対する認識から直接派生したものである。それは自己存在の基盤になる場の探求である。すでに見たよ

うに、本文では外と内との対立が軸をなしており、目に見えない外部の圧力によって、前半部では、すべての創造が挫折する。そして、〈私〉―〈造物主〉自体も放浪の旅を強いられる。それは、自己の領土内に、《地所》(《土台》)が、外部の圧力を支えうる場がなかったか、少なくとも常にはなかったことを意味している。したがって、『地所』の探求は、文脈上の論理(単なる〈造物主〉の帰還の旅)を越えて重要な意味を持ちうるのである。

(1) 外部世界の敵意を迎へ撃つ場、闘いの場の画定。mapa には、〈決闘(戦闘)が繰り上げられる場〉という意味があり、現実との抗争を生き抜くための拠点作りに繋がる。

(2) 創造を可能にする場の画定。あの空しい創造行為が領土の開拓作業の一貫であったことを考えれば、自己内面、『遠き内部』に深く分け入るための拠点作りにも通ずる。いずれにしても、闘い(探索)の舞台を内部世界に設定しようとする試みを象徴的に表わしているのである。

それでは、ここで、『地所』の発見と、その前(造物主)の放逐直前)・後の所領地の風景、創造の挫折の理

由開陳を見てみよう。

(7) そこで私は一切を削除してしまう。するともう沼地しか残らない。他のものは何もなく、わが所領地であるいくつかの沼地、私を絶望させようとする沼地しかない。(X)

(8) それは明らかに私の地所だ。それを説明することは出来ないが、私の地所を他人の地所と取違えるようなことがあれば、恰も自分を他人と取違えるようなものだろう。そんなことはありえない。(XII)

(9) そこで、私は突然わが所領地にむかう。それは鉤形に彎曲(銃床の形を)している。広大で光輝いている。その輝きのうちには陽光があり、狂ったはがねが水のようにうち震えている。(XV)

(10) 地所の上になら、建てることのできる。私は建てるだろう。今では確かだ。私は救われる。私には土台がある。

かつては、すべてが、当然のことだが天井も地面もない空間にあったので、そこに一つの存在を置いて、私はそれをもう二度と見ることがなかった。それは消えて無くなってしまった。転落によって姿を

消してしまったのだ。(XVI)

《地所》の発見を境に、絶望は希望に変わる。かつては《沼地》でしかなかった所領地には、今では《銃床の形をした》地所の上で建設と闘争を待ち望む《狂ったはがね(劍)》が水のようにうち震えている。《地所》は《空間》に《土台》を与え、その不在は《空間》を虚空に変えるのだ。自己の拠点であり、存在の場である《地所》と虚無に開かれた《空間》terrain/espace の対立を軸に、想像界での創造の可能性が未来形で、その不可能性が半過去形で語られる。ここに至って、現在は過去に後退し、成就されなかった『創世記』のからくりが明らかにされる。

《大地(terrain)なき被造物(etre)は、転落(chute)の運命にある。》

ミシヨ一の戦闘の姿勢を象徴的に表わす、je battrai の響に通ずる je battrai を相図に、テキストの最終部では、現在の空白を埋める形で、建設の希望が企図として、意志として未来形で表白されるのである。

(11) わが地所には、確かに、まだ沼地が多い。でも私は少しずつそれを乾かしていこう。地所が十分に固

くなったら、そこに労働者たちの一家族を住わせよう。

わが地所の上を歩くのは楽しいことだろう。私がそこで何をするか、その全貌が明らかになるだろう。

私の家族は大人数だ。君たちはそこにあらゆる型の人間を見るだろう。私はまだその家族を見せていない。でも君たちはそれを見ることになるだろう。そしてその発展ぶりが世界を驚かせるだろう。(XVII)

この未来形の建設作業には、『私の最大級の貧困と無能力を度あることに予告した』母(XIX)に象徴される現実世界を射程に据えた復讐の意図がはつきりと読みとれる。ミシヨールにおいて、未来形がしばしば固い決意表明を表わすことを考えれば、そこには現実世界に対する宣戦布告の意味合いが籠められていると言いうるだろう。世界に対してその反対物、批判物を対置するといふミシヨールの独特の闘争の一形式がここに予告されているのである。

※

現実との射程距離が短いのが、「あとがき」で述べられる、いわゆる「健康法」としてのエクリチュールの一

つの大きな特徴である。それは、書く行為が『耐え難い緊張、あるいはそれに劣らず苦しい遺棄状態からのため』という直接的要請に込められているからである。この直接性は、具体性、個別性と共にミシヨールの想像界の特質でもあるが、著作集『わが領土』全体に一つの緊張感をもたらす効果を生んでいる。それによって、テクストの透明度が高まり、想像界と現実界の葛藤、両者の拮抗作用が浮彫りにされるのである。一例として、ミシヨールの攻撃性を見事に示している「私の仕事」の一部を引用しよう。

Je peux rarement voir quelqu'un sans le battre.

D'autres préfèrent le monologue intérieur. Moi, non.

J'aime mieux battre....

En voici un/Je te l'agrippe, toc./Je te le ragrippe,

toc./Je le pends au porte-manteau./Je le décroche/

Je le repends./Je le redécroche. Je le mets sur la

table, je le tasse et l'étouffe./Je le salis, je l'imonde./Il

revit.....

私が誰かに会って、そ奴を叩きのめさずに済むことは滅多にない。他の連中は内的独白とやらを好む。

私は違う。叩きのめす方がずっと好きだ……(舞台はレストラン)ほら連中の一人がここにいる／あんなのために奴をひつつかみ、こつん／あんなのためにもう一度奴をひつつかみ、こつん／奴を外套掛けに引掛ける／奴をまた外す／奴をまた引掛ける／奴をまた外す／奴をテーブルの上に置き、奴を押しつけ、奴の息の音をとめる／奴を汚し、奴を水浸しにする／奴は息を吹き返す……

この直接性は、現実界と想像界の力関係、位置関係の逆転を可能にするが(ミシヨ一の想像力の運動は可逆的<sup>13</sup>)であり、大部分の場合それは再逆転する)、反面、それだけ物足りなさを残すことも否めない。現実世界に対する忿怒の直接的表出は、終始一貫《contre》<sup>14</sup>の詩人であるミシヨ一の真骨頂とも言えるものだが、《敵対者を傷つけたたり、あるいは抹殺してしまうのではなく、それに對峙すること、自己のうちに火焰を吐くドラゴン Dragon de feu を創り出す》<sup>15</sup>という《呪詛》、《言葉の鉄槌》<sup>16</sup>による反撃の奥義を極めて始めて、世界の根柢を揺がす弱者の真の力となりうるのである。確かに、現実のなすがままにはさせない、という《干渉》<sup>17</sup>の実践は、その直接

性故に、敵意の中で生れたエネルギーを蓄積、増殖する《蓄電池》<sup>18</sup>の性能が未だ十分ではないことをしばしば露呈する。しかしそれは、『わが領土』の詩人が未だ確固たる自己の基盤(terrain)をもたないままに、現実との抗争を生き抜かねばならない、という困難な状況に立たされていることの証左でもあるのだ。この terrain を強固にするための戦略として編み出されたのが《干渉》である。現実の別名である《顔のない敵共》<sup>19</sup>と戦端を開くには、闘争を内在化し、敵のエネルギーを掠め取らねばならない。しかし、戦場(terrain)は未だ確固たるものではないので、すぐに空間に変わってしまう。敵意と緊張の中から生れ、詩人の唯一のエネルギー源となる怒りは、《保ち続けるのが苦痛な一つの均衡》<sup>20</sup>であり、すぐに疲労に席を譲ってしまう。とはいえ、現実界との力関係をたとえ瞬時でも逆転しなければ、敵のなすがままにされてしまうだろう。《干渉》は、このような切実な認識から生れたものであり、《地所を少しづつ乾かす》<sup>(XVI)</sup>とはその不断の実践に他ならない。闘いながら走行するというミシヨ一独特の自己探究の方式は、《干渉》の実践――《地所》の探求の過程で培われたと言えるのである。

II

MES PROPRIETES

Dans mes propriétés tout est plat, rien ne bouge;

I (1) et s'il y a une forme ici ou là, d'où vient donc la lumière? Nulle ombre. P. 119.

II (15) ...et si je vois quelque chose émerger, je pars comme une balle et saute sur les lieux, mais la tête, car c'est le plus souvent une tête, rentre dans le marais; P. 119.

III (12) ...je vois dans la vie extérieure ou dans un livre illustré un animal qui me plat, une aigrette blanche par exemple, et je me dis: Ça, ça ferait bien dans mes propriétés...Mais quand j'essaie de le transporter dans ma propriété, il lui manque toujours quelques organes essentiels... P. 120.

IV (3) ...mais telles sont mes détestables propriétés que si je tourne les yeux, ou qu'on m'appelle dehors un instant, quand je reviens, il n'y a plus rien, ou seulement une certaine couche de cendre...P. 120.

Et si je m'obstine, ce n'est pas bêtise.

V C'est parce que je suis condamné à vivre dans mes propriétés et qu'il faut bien que j'en fasse quelque chose.

Je vais bientôt avoir trente ans, et je n'ai encore rien; naturellement je m'énervé. P. 120.

VI (13) ...et certains jours dans ma propriété j'ai là cent mille crayons, mais que faire dans un champ avec cent mille crayons?

VII (13) Bien, mais tandis que je travaille à former un dessinateur (et quand j'en ai un, j'en ai cent mille), voilà mes cent mille crayons qui ont disparu. P. 121.

...Et si, pour la dent, je prépare une mâchoire, un

VIII (2) appareil de digestion et d'excrétion, sitôt l'enveloppe en état, quand je suis à mettre le pancréas et le foie (car je travaille toujours méthodiquement), voilà les dents parties, et bientôt la mâchoire aussi, et puis le foie, et quand je suis à l'anus, il n'y a plus que l'anus, ça me dégoute... P. 121.

註 67年版では、( ) 部分が削除されている。

IX (4) Devant et derrière ça s'éclipse aussitôt, ça ne peut pas attendre un instant... P. 121.

X C'est pour ça que mes propriétés sont toujours absolument dénuées de tout, à l'exception d'un être, ou d'une série d'êtres, ce qui ne fait d'ailleurs que renforcer la pauvreté générale... P. 121—122.

X } Alors je supprime tout et il n'y a plus que les  
(7) } marais, sans rien d'autre, des marais qui sont ma  
} propriété et qui veulent me désespérer. P. 122.

Mais voici que vient une femme du dehors; et me  
criblant de plaisirs innombrables...

...promptement harassé donc de tant de voyages où  
je ne comprends rien, et qui ne furent qu'un partum,

XI } je me sauve d'elle, maudissant les femmes une fois  
(5) } de plus, et complètement perdu sur la planète, je

pleure après mes propriétés qui ne sont rien, mais  
qui représentent quand même du terrain familier, et  
ne me donnent pas cette impression d'*absurde* que  
je trouve partout. P. 122.

Je passe des semaines à la recherche de mon terrain,  
humilié, seul; on peut m'injurier comme on veut dans  
ces moments-là.

XII } Je me soutiens grâce à cette conviction qu'il n'est  
(8) } pas possible que je ne retrouve pas mon terrain...  
P. 123.

XIII } ...c'est nettement *mon terrain*. Je ne peux pas  
expliquer ça, mais le confondre avec un autre, ce  
(8) } serait comme si je me confondais avec un autre, ce  
n'est pas possible... P. 123.

Ceux qui sont habiles en psychologie, ... auront

peut-être remarqué que j'ai menti. J'ai dit que  
mes propriétés étaient du terrain, or cela n'a pas  
toujours été. Cela est au contraire fort récent,

XIV } quoique cela me paraisse tellement ancien, et gros  
(14) } de plusieurs vies même.

Elles étaient tourbillonnaires; semblables à de  
vastes poches, à des bourses légèrement lumineuses,  
et la substance en était impalpable quoique fort  
dense. P. 124.

J'ai parfois rendez-vous avec une ancienne amie.

Le ton de l'entretien devient vite pénible. Alors je

XV } pars brusquement pour ma propriété. Elle a la forme  
(9) } d'une crose. Elle est grande et lumineuse. Il y a du

jour dans ce lumineux et un acier fou qui tremble  
comme une eau... P. 124—P. 125.

...Sur un terrain on peut bâtir, et je bâtirai.  
Maintenant j'en suis sûr. Je suis sauvé. J'ai une base.

XVI } Anparavant, tout étant dans l'espace, sans plafond,  
(10) } ni sol, naturellement, si j'y mettais un être, je ne le

revoyais plus jamais. Il disparaissait. *Il disparaissait  
par chute*... P. 125.

Maintenant, ça ne m'arrivera plus. Mon terrain, il est vrai, est encore marécageux. Mais je l'assécherai petit à petit et quand il sera bien dur, j'y établirai une famille de travailleurs.

XVII (B) Il fera bon marcher sur mon terrain. On verra tout ce que j'y ferai. Ma famille est immense. Vous en verrez de tous les types là-dedans, je ne l'ai pas encore montrée. Mais vous la verrez. Et ses évolutions étonneront le monde... P. 126.

Et puis dans l'espace, tout être devenait torp vulnérable. Ça faisait tache, ça ne meublait pas. Et tous les passants tapaient dessus comme sur une cible... P. 126.

XVIII ...Mère m'a toujours prédit la plus grande pauvreté et nullité. Bien. Jusqu'au terrain elle a raison; après le terrain on verra... P. 126.

(尚アアラビヤ数字は訳文番号である。)

※

本テクストでは、表題の mes propriétés の他に、ma propriété, mon terrain と類似の意味領域を持った語が微妙に重なり合いながら、巧みに(意識的に)使い分けられている。それらの絡み合いをほぐすことで、表題の

もう意味、ミシヨールにおける espace/terrain の深い意味作用を探ってみよう。

※

特に前半部における、領土の極度の貧困、さらには、領土に対するアンビヴァレントな感情の表出に接すると、mes propriétés は mé-propriété (ce qui (m) est mal propre)、『私には不向きなもの』に通ずるミシヨール一流の苦いユーモアではないかという感じがする程である。それは何か『井戸の中の石のように』存在(=肉体)の中に幽閉されている自己に対するミシヨールの分岐した意識を想起させる。より広い、自由に動き回れる空間に魅惑されながらも、『空間の中では、存在はすべて余りに傷つき易い』(XVIII)しかも、人間は世界から逃れ出る術はない。『器は閉ぢられて』(22)のである。

また所有を全的に剝奪された状態にありながら、Mes propriétés (一義的な意味は所有物)とは皮肉以外の何ものであろう。さらに、現代では、この語がへ立派なお屋敷の意味でしばしば使われることを考えれば、このブルジョワ的な語感、それこそミシヨール向きではない。それでは何故複数形なのだろう。単に稀に見る貧困を

呈する《唾棄すべき領土》を際立たせるための反語法としてなら、単数形で十分ではないだろうか。先ず、この語が、物質、現象などの〈固有性〉、〈特性〉の全体を示す場合、一般には複数形で使用されることに注目しよう。この文脈で表題を読み直してみると、(1)私の所有する場(複数)(2)私の固有性(特性)↓〈固有性(特性)をもった私の場〉となる。表題と重複する意味領域をもった *propriété, terrain* がテキスト中で如何なる役割を担っているかを検討することで、その固有性(特性)とは何かを明らかにしたいと思う。

(1) *ma propriété*

本文では、表題の単数形が都合四度(実際には五度だが、話者に関わるものとしては四度)出てくる。すでに沼地の風景(X)、狂ったはがねが希望にうち震えている光景(XV)は引用済みなので、前半部に出てくる残りの二例を引こう。

(II)でも、私がそれ(その動物)を自分の所領地に運んでこようとすると、いつもいくつかの大事な器官が欠けている。(III)

(III)そして、何日間か、わが所領地には十万本の鉛筆が

ある。でも野原で、この十万本の鉛筆をどうしたらよいのだろう。(VI)

*na propriété* には、複数形がもつ意味の拡がりがない、それは、文字通り *ce qui m'appartient* 私に所属するもの、その時々〈私〉が所有しているもの、という意味で、領土の現状を表わしている。この(II)、(III)はそれぞれ、所有と創造の困難な状況を示しているが、先に引例した(X)(XIV)は、それぞれ領土の絶望的な状況と、《地所》を得たあとの建設(戦闘)の希望に輝く状況を窺わせている。したがって、*na propriété* は、創造の場であり、想像界と言ってもいいかもしれない。最初の三例では、現実界と通底しており、外部の圧力をまともに受けているが、最後の例では、《昔の恋人》との会話の調子に耐えられなくなって戻ってみても、創造の可能性は失われていない。しかし、本文において、この語が *terrain* の有無を微妙に映し出す、いわば鏡の役割を担っていることを考えれば、単に現実界に対する想像界と特定するよりは、広い意味で詩人の所有する空間の謂で使用されていると見做すべきであろう。でも、それは、*terrain* の支えを失うと、いつ無限の空間に変貌するや

も知れぬ空間なのである。したがって、*ma propriété* は、その時々詩人が所有する（あるいは所有される）場を指示し、*propriétés* の一つの特性である空間を共示していると言える。

(2) *mon terrain*

本文で最も重要な観念であり、鍵語である *terrain* については、《不在の支柱》に対する自己の基盤（《土台》）の意味で使用されていることはすでに指摘した。

初出の *terrain* (XI) は限定されておらず、部分冠詞を載き、形容詞の修飾を受けているので、*mes propriétés* の属性で、《親しげな地所（土地）》という性格を示していると考えるのが自然であろう。ところが、(XI) のすぐ後で、*Je passe des semaines à la recherche de mon terrain* (XII) と続へるのである。この *mes propriétés* から *mon terrain* への唐突な移行は何を意味するのであろう。*propriétés* を、その属性、あるいは部分である *terrain* によって表わす提喻法と解釈すべきであろうか。表面上は、《地所》の探求は〈造物主〉（〈私〉）の祖国への帰還の旅であるという体裁をとりながら、すでにそこに大きな論理の裂目を覗かせている。前半部では一度も出てこ

なかったこの語が、後半部では *mes propriétés* に替って、いわば主役を演ずることを考えれば、ここに作者の何らかの意図が隠されていると見做すのが自然であろう。ここに、ディスクールの巧みな罫が仕掛けられているのだ。《地所》の発見のあと、作者に近い〈私〉<sup>(23)</sup> が出て来て、取ってつけたような調子で次のように告白する。

(4) 心理学に巧みな人なら……、私が嘘をついていたことに多分気が付いたかもしれない。私はわが領土が地所（陸地）だと言った。ところが必ずしもそうではなかったのだ。逆にそう言ったのはごく最近のことだ。私には随分と昔のことのように、いくつもの生命を孕んでいるようにさえ見えるのだが……わが領土は渦巻状であった。巨大な胞衣に、ほんのりと光輝いた囊<sup>くわう</sup>に似ていた。その実体は非常に稠密でありながらも、触知できないものであった。(XIV)

ここに至って、《領土》は、かつては必ずしも《地所》（陸地）であったわけではなく、そうなったのは極く最近（地所の発見後）であることが明示される。《地所》になる以前の領土は、大気の渦巻↓密度は濃い触れることのできない風↓《空虚》<sup>(24)</sup> であり、*poches, bourses* (袋

状のもの、むろん、現段階では、この二つの語を解剖学用語として特定できないが、《いくつもの生命を孕む》場としての《胞衣》(子宮)、そして《囊》(複数形で陰囊の意あり)との結合による誕生の可能性を秘めた虚無の空間を連想することはできる。)に似た球体、球形空間であった。それは必ずしもテキスト前半部の状態を示しているとは限らないが、潜在的に espace/terrain の対立があることを暗示している。しかも前章で引用した《造物主》の転落直前の《所領地》の風景は一面沼地である。したがって、文脈の上では提喻法として、non terrain = mes propriétés であるが、実際にはこのイコールの関係は必ずしも成立しないのだ。

(XI) の動詞 *représenter* を《rendre présent un objet absent 不在の事物を現前に示す》という本来の意味にとれば、1) 不在なのは領土ではなく地所であり、2) 地所の不在により、《私》は《遊星》上に転落し、結果として、領土自体をも見失ったと解釈できる。《地所》は単なる領土の部分や属性ではなく、領土の存亡に関わる最も重要な要素なのである。mes propriétés → non terrain の一見唐突な移行は単なる修辭法ではなく、深

層部において、強い必然性をもっているのだ。その結果、すでに指摘したように、《地所》の探求は単なる領土への帰還ではなく、独自の意味作用を担うのである。

前半部の《領土》の地形・地質に関する描写は、沼地の風景(X)と、本章の(1)で引用した十万本の鉛筆のある野原の光景(VI)の他もう一カ所テキスト冒頭部に出てくる。

(5) そして、私は何かが現れ出るのを目にすると、弾丸のように飛び出して行き、その場に突進する。でも頭は、大抵の場合、それは一個の頭だからなのだが、沼の中に戻ってしまう。(II)

《造物主》の出奔直前に、《所領地》が一面《沼地》であったことは確かだが、それ以前には、ある時は《野原》(しかしその後、鉛筆のために設計技師を形作っている間に、鉛筆は消え失せてしまう)(VI)であったこともまた確かである。また(5)によって、被造物の消失が、(X)によって領土の極度の貧しさが、《沼地》に関係していることが明らかになる。《前へ、後へ、すぐにそれは消え失せてしまう。一瞬たりとも待つなんてことはありえないのだ》。(IX) また建設の希望を表白する条

りでも Mon terrain est encore marécageux (XVII) とあり、地所発見後も、まだ沼地が残っていることが示され、それを乾かすことが建設の前提とされる。地所発見以前は、外部(現実世界)と係っている間に、すべてが沼地に戻り、廃虚と化す(IV)か、《外部の女性》と快楽に耽っている間に、《造物主》自身も、《転落》の憂目に会う(XI)。それに反し、地所発見後は、《昔の恋人》との会話が耐え難くなり、自分の《所領地》に戻っても、希望の光が射している(XV)。

この《沼地》は、海水面と同様に、不安定、不均衡のイメージに繋がる。つまり《不在の支柱の上に》建てられた存在を暗示しているのである。『夜動く』所収の「海についての忠告」にそのアナロジーを見ることができ

水平になることのないこの底無しの表面、……この海水は、いかなる場合にも役に立ちうる真の基盤 (vraie base) があなたのうちにないことを感じさせ、そして、地面そのものも、あなたの精神の歩みによつては、足元から逃げ去ってしまうように思われるのだ。<sup>(25)</sup>

海水が地面を逃げ去るものに変えてしまうことがありうるように、《沼地》の存在は《地所》の基盤を揺がす。《沼地》がある限り、《地所》は決して存在の確固たる足場、支えにはならないのだ。それは、真の均衡は《未知のまま、無意識裡に留まっており》<sup>(26)</sup>、存在の《中心》が行方不明だからである。この《真の基盤》がない、《中心と不在の間》に流刑されているという認識は、ミショーの基本的な自己認識であり、彼の自己探究の源になるものである。ミショーにとって、存在と空間とは中心を同じく同心円の関係にはなく、したがって深淵に魅せられると、地面は逃げ去り、存在は奈落の淵に転落してしまふという幻影に捉われる。同様に「未来」の一節にあるように、世界は中心を持った閉ざされた器 (Mon-de fermé centre) であり、自己の中心を見出せない存在は外部の中心に惹き込まれそうな眩暈を覚え、それに抵抗するために不断の緊張を強いられるのである。それでは、『わが領土』の末尾を飾る詩篇、「未来」を見てみよう。

L'Avenir  
Quand les mair,

Quand les mah,  
Les marécages,  
Les malédictions,  
Quand les mahahahas,  
.....

Quand l'Épouvantable-Implacable se débondant en-  
fin,

Assoira ses fesses infectes sur ce Monde fermé,  
centré, et comme pendu au clou,

Tournant, tournant sur lui-même sans jamais ar-  
river à s'échapper,

Quand, dernier rameau de l'Être, la souffrance,  
pointe atroce,

survivra seule, croissant en délicatesse,  
De plus en plus aiguë et intolérable... et le Néant

têtu tout autour qui recule comme la panique...  
Oh! Malheur! Malheur!

Oh! dernier souvenir, petite vie de chaque homme  
\*1  
petite vie de chaque animal, petites vies pun-  
ctiformes; \*2

Plus jamais.  
Oh! vide!  
\*3  
Oh! Espace! Espace non stratifié... Oh! Espace,  
Espace!

〈mah〉とらう呪文を思わせる音から、marécages (沼地)と malédictions (呪詛)が生れ、「世界」に対する猛り狂った《呪詛》は、『言葉の鉄槌』となつて、marécagesを末来に運ぶ、Malheur (不幸)のとらう迄送り届ける。一方、未来においては、『沼地』は、「恐るべきもの」の「仮借なきもの」となつて溢れ出し、逃れ出ようともがく「世界」をその奈落のうちに併呑(29)しようとする。

《最後の小枝》となつた「存在」は次第に激しさを増す《苦痛》<sup>(30)</sup>として生き残り、「世界」が「虚無」と化し、恐慌に襲われたように後退して行くのを目撃するが、その瞬間、「不幸」への呼び掛けと共にすべては無に帰す(Plus jamais)。詩人の生の礎である《空虚》も《層のない空間》と一つになる。

こゝでは、『沼地』は『恐るべきもの』の「仮借なきもの」である奈落の淵として、『層のない空間』のイメージへつながる。ミシヨーにとつて、『海』と『沼地』は、共

に深淵を經由して、空間に通ずるが、前者が運動体として幻惑的な相貌を持つのに対し、後者は不動の中に残虐さを秘めた恐怖の対象なのである。

《沼地》は土地空間である限りにおいては、一つの terrain であるが、その底に無限性を匿し持っているという特性において、有限な terrain と対立する。ここに至って、前半部の領土の特性は、いわば《層のない空間》であったことが明らかに、espace/terrain の対立が「わが領土」の軸になることが確認されるのである。

※

ミシヨ一の空間に対する特異な認識は、われわれに奇異な印象を与えるが、それは、彼の空間の把握の仕方が、知的、網膜的<sup>(31)</sup>ではなく、《運動感覺的》、《体感覺的》であることに起因している。ブレッションの指摘するようにミシヨ一の空間が《肉体の運動、諸器官の活動を通じて、肉体によって感得された<sup>(32)</sup>空間であると言えるのも、彼の肉体に対する意識が病的な迄に過敏であり、彼の想像力が運動と侵入に対する深い欲望を発条としているからである。ミシヨ一の想像力の特質の一つは、すべてを空間化しようとする傾向のうちにあるのだ。<sup>(33)</sup>

したがって、なにかんづく、肉体は一つの空間として把握される。先に引用した領土の昔の姿である《空虚》が風となって渦を巻く球体も (XIV)、やはり胎内のイマージュを彷彿とさせるし、領土の開拓も沼に戻って行く頭を追跡する (II) ことから始まっている。さらに、テクストで唯一詳細に描かれている創造行為は、齒から内臓諸器官を経て肛門に至る胴体製造の企て (VII) である。

ミシヨ一の作品を手当り次第開いて、頭を始めとして、手足、心臓他の臓器、骨、齒、瓜に至る迄、人体の破片 (部分人間<sup>(34)</sup> morceau d'homme、と言ってもしばしば生命を有し、《私》をさえ主張するのだが) に出会わないことは稀である。ミシヨ一の内部空間は決して観念的、知的な想像空間ではなくて、第一義的には、肉体の中の空間なのである。

呪われたわが肉体を巡っているうちに、私はある領域に到達した。そこでは、私の<sup>キタ</sup>諸部分はごく稀にしかおらず、そこで生きるためには聖人であらねばならなかった。<sup>(35)</sup>

肉体を駆け巡るという幻影は、直接的には、熱その他で肉体が苦痛を訴えるときに生れるのだが、自己の同一

性を求める想像的行為を指し示していると言える。自己でありながら他者である多数の〈私〉<sup>(36)</sup>を統一する術を持たないミシヨールにとって、それを保証すべき場である管の肉体の探索は単なる幻影以上の意味をもつ。そのことは、ミシヨールの自己探究(真の基盤を求めて)が決して形而上学的なものではなく、肉体を通過して精神に至る道程であることの証左にもなるのだ。《自己を駆け巡るために書く》<sup>(37)</sup>というミシヨールの言葉は、ある意味では字義通りに理解すべきである。肉体こそ先ず探索すべき場なのだから。

ミシヨールの生は、肉体に対する意識の度合いに応じて、苦痛と遺棄の間を揺れ動く。

A force de souffrir, je perdis les limites de mon corps et me demeurai irrésistiblement.

Je fus toutes choses.

あまりに苦しんだので、私は自分の肉体の境を失ってしまい、抗し難く、途方もない程拡がってしまった。

私はありとあらゆるものになった。<sup>(38)</sup>

苦痛状態では、肉体は錯乱状態に陥り、〈私〉を支え

きれず、境を失って、広大な空間となる。自己の同一性を確認する場を失った〈私〉は次々にオブジェに宿り、メタモルフォーズの狂宴を生きなければならぬ。

一方、遺棄状態では、存在は《骨や、筋肉や、肉、記憶や企図をもった一個人の間》ではなく、《天と地の間、無限の空間の中を漂流する微細な単細胞動物》<sup>(39)</sup>に自らを擬する程になる。あるいは疲労がつのり、夢幻状態に陥ると魂は肉体を離れる。

魂が腹のところから肉体を離れ、泳ぎ出すと、何やら知れぬ解放感が生ずる。<sup>(40)</sup>

最も恐ろしい悪夢は肉体の不在である。

Et rien pour digérer leur épouvante. Aucun soutien. Pas de corps. Il n'y aura donc jamais personne pour avoir un corps ici.

彼らの恐怖を消化するものが何もない。いかなる支えもない。肉体がない。ここでは肉体をもつことのできる者は絶対に一人もいないだろう。<sup>(41)</sup>

また《夢見るためには水泡の形になり、感動するためには蔓の形になる》<sup>(42)</sup>変幻自在な生きものであるメードザンたちは、この世界に留まるためには、<sup>(43)</sup>一なる存在である

ことを放棄しなければならぬ (Ils ont détruit son <sup>(43)</sup>《un》)。彼らは、最後には、呪われた肉体に最早穢されることのない《純粹な裏》<sup>(44)</sup>と化して、あらゆる物質から解放され、かつて人生の忌避者・ミシヨール Michaux-Insoumis が夢見た《失われた楽園》<sup>(45)</sup>に回帰する。

肉体の喪失、肉体からの離脱のテーマは、存在の支えとしての、あるいは牢獄としての肉体に対するミシヨールのアンビヴァレントな感情を窺わせてくれるだけでなく、肉体と空間の関係が、言いかえれば内と外の空間の関係がミシヨールの世界的基本的な構図であることを明示してくれる。『わが領土』の詩人にとっては、まだ《内に外に恐しきもの》である《真の空間》<sup>(46)</sup>体験はないにしても、先ず内と外との仕切りを強固にすることが、逼迫した世界との関係を生きる上での前提になった筈である。存在の支柱がないという空虚感が領土の開拓の直接的な動機だったことを考えれば、存在の《支え (soutien)》であり、内と外の空間の《境 (limite)》である肉体が、領土の《土台》であり、その空間化 (《層のない空間》になること) を妨げる仕切りの役を果す terrain と密接な関係をもつことは否定し難い。

※

それでは、テクストに戻って、この terrain-corps の関係を跡付けてみよう。《私》が《遊星》上に転落したのも、《まったく分けのわからない香気の如きものにならなかった多くの旅に疲れ果てた》(XI) 結果である。すでに指摘したように、《疲労》は肉体に対する意識を遠のさせる《麻薬》の効果を持つが、それが昂ずると遺棄状態に陥る。現実世界での詩人は、「ぼろきれ」(『わが領土』所収) に見られるように、絶えず膨ませる必要がある目に見えない小さな穴のあいた気球を思わせる。

...je me chiffone. Je m'affaise, je n'y (＝ dans le monde) suis presque plus, mon veston s'aplatit sur mon pantalon aplati.

私はしわくちゃになる。私はしぼんでしまい、ほとんどそこ(世界)に存在しなくなる。私の上着はべしゅんこになり、これまたべしゅんこになったはずばんの上にある。<sup>(47)</sup>

《遊星》上への転落のイメージ<sup>(48)</sup>は、遺棄状態に陥って肉体に対する意識を喪失してしまった状態を彷彿とさせてくれるのである。

また、ミシヨール第三のメスカリンの書である『深淵における認識』では、肉体と住みかとの関連について次のような所見を見出すことができる。

住みか (demeure) というものは (小屋であれ、部屋であれ、穴であれ、巢であれ) 人が己自身の肉体について抱くあの内部の印象の外部での実現にすぎない。<sup>(49)</sup>

ここでは、住みかは肉体の隠喩以上のものであり、いわば肉体の外部に落す影である。

魂にとって肉体が住みか (呪われた牢獄であるにしても) であるように、《領土》はいわば〈私〉の住みかであるが、土台のあることが領土を住みかにする前提になる。したがって、《地所》の探求は、領土を住みかにするための不可欠な行程なのである。

以上のような観点から、《地所》の探求―発見の過程を読み直してみよう。

Je passe des semaines 以下の一節 (XII) は先に引用した「ぼろきれ」の次の一節を想い起させてくれる。

あるものは私を槍で刺し貫く、あるいはサーベルを使う。……またあるものは、楽しそうに、モーゼルワインの瓶を一本とって……私に手痛い不意打ちを

喰わせる……一人の魅惑的な女は、私をハイヒールで激しく蹴り上げる。……

打ち棄てられた状態に陥ると、それこそ、《誰だって好きなように私を侮辱できる》(XII) のである。

また Je ne soutiens… 以下の一節 (XII) は、《自己を支えるもの (|| 肉体) はないけれども、私に固有なものであるその支え (|| 肉体) を見出せない筈がないという確信が、支え (|| 肉体) の代りになっている》とも読める (aucun soutien || pas de corps)。そして、《地所》の発見の条り (XIII) は、terrain-corps の重なりあった関係を見事に証明してくれる。《地所》を《肉体》に置き替えて読み直してみると、《私の肉体を他人の肉体と取違えるようなことがあれば、恰も自分を他人と取違えるようなものだろう。そんなことはありえない》となる。したがって、《地所》は、私が私であること、つまり自己の同一性を保証する場である肉体を明らかに共示しているのである。

※

このように、《地所》を terrain-corps の密接な関係のうちで捉え直してみると、いくつかの点が明瞭になって

くる。

まず、昔の領土の姿が、風が渦巻く《空虚》であったという条り(XIV)は、《胸にあいた小さな穴》に吹き荒ぶ《風》に悩まされた『エクアドル』の詩人の状況と重なってくる。さらにそれは『胞衣』と『囊』による誕生以前の虚無の球体のイマージュに根拠を与える。

第二に、『地所』の探求の意義がにわかには具体性を帯び、その重要性が確認される。『エクアドル』で《空虚》と意識された肉体を存在の支えにする試み、つまり、治癒の企て<sup>(50)</sup>の意味合いが付加されるのだ。またそれは、自己の同一性を求める試みに通ずる。自己の《真の基盤》がないという認識は、直接的には、空虚感から発したもので、空虚故に、自己の中に多くの《私》<sup>(モテ)</sup>を名乗る他者が宿り、存在の中心(仮の)が始終移動して、存在は、常に不均衡な状態に曝されるのである。未だ自己内面の表層部に陣取り、現実世界との、いわば《白兵戦》corps a corpsを闘い抜かねばならない『わが領土』の詩人にとっては、存在の支えであり、自己の同一性の確認を唯一可能にしてくれる場である肉体こそが、戦場であり、探索の場なのである。しかし表層部に留まる限り、結局、

同一の《私》<sup>(モテ)</sup>を変えたいという誘惑には抗しきれず、緊張は直ちに疲労に変わり、治癒を望むことすらできなくなる。治癒を目指す強固な意志と、この自己の立地点に対する認識が、『遠き内部』の探索へと詩人を駆り立てるのである。ミシヨ一の自己探究の最も大きな特徴は、求心と遠心の相矛盾した運動の繰返しの中で、自己のより深部へと向うその足取りのうちにある。『わが領土』では求心運動が主要な発条の役を果しているのに対し、『あとがき』でも明らかのように、『遠き内部』を特徴付けているのは、むしろ遠心運動だと言えるであろう。したがって、『地所』の探求は、メスカリン等による壮烈な空間体験の末、Loin, loin maintenant est l'Un(遠くに、今では遠くに、「一なるもの」<sup>(51)</sup>は)の認識に至るミシヨ一の走行の慎しやかな一里塚の榮譽を担うのである。

第三に、espace/terrainの対立は、ミシヨ一の基本的構図である espace/corpsの対立でもあることが確認される。これによって、成就されなかった『創世記』は、『創世記』本来の意味を鮮やかに逆転する。《肉体なき存在(人間)は、転落(墮落)する運命にある》

詩人のこのブラックユーモアには切実な響がある。  
《造物主》自らが転落してしまったために、『創世記』  
が成就されなかったのだから。

(3) mes propriétés

空間は、肉体と《相互滲入》*bain réciproque* <sup>(52)</sup>の関係  
にあり、その内に含まれると同時に、それを内に含んで  
いる。この関係が失われると、内部は外部のうちに霧消  
し、存在は場と共にその固有性を失ってしまう。

「深淵という状況」では、メスカリンの幻覚症状によ  
って、この境(肉体)が取払われてしまうと、《真の形  
而上学的人間》が出現するという報告がなされている。

この《Homo Metaphysicus》は、『自らの領土から追放  
され、固有性もなく、最早領土(固有性)も思い出せな  
い「非物質」の大地の唯一の住人<sup>(53)</sup>』として《無限》と交  
渉し、遂には自らを《神》と同一視する錯乱に陥る。

このように、ミシヨールにあっては、*propriétés* という  
語は、同時に存在の固有性であり、場でもある《肉体》  
と《空間》の観念に結び付く。両者の《相互滲入》の関  
係が唯一自己の同一性を保証しうる場であり、その関係  
が破壊されれば、存在は無限の中の一つの場にすぎなく

なる。したがって、*mes propriétés* は、単に私の所有す  
る場ではなく、《私》を私たらしめる場として理解され  
るべきであろう。ここに至って、題名が単に漠然と空間  
を共示するだけの *Ma propriété* ではなく、肉体との《相  
互滲入》の関係を示しうる *Mes propriétés* でなくては  
ならない必然性が明確にされたと思う。 *Mes propriétés*  
とは、《肉体》と《空間》の二つの固有性をもった自己  
存在の隠喩なのである。

また、音の連鎖の中で (*mes propriétés—né-propriété*)  
題名を捉え直してみると、

(1) 《私の(複数の)大邸宅》という《不適切な》(*mal  
propre*) 語の使用が、かえって反語法の効果を生み、領  
土の貧しさが際立つ。

(2) 《私》に固有の場ではあるが、《私むきではない》  
(*qui n'est mal propre*) 肉体と空間—自己存在に対す  
るミシヨールの分岐した意識が浮き出てくる。

ミシヨールの肉体と空間に対するアンビヴァレントな感  
情、自己との矛盾した関係、さらに音楽性に敏感な詩人  
の特質を考慮すれば、*mes propriétés* を *né-propriété*  
と読み直してみるのも、あながち独断的とはかりは言え

ないだろう。そうすることによって、題名の必然性がより強化され、パラドクスルな意味の拮がりのなかで、『わが領土』の詩人の困難な立場が一層鮮明に浮彫りにされるのである。

I テクスト

著作集『わが領土』*Mes propriétés* は一九二九年に J. O. FournCADE, Paris から(二百七十部限定)出版され、後に、『夜動く』*La nuit remue*, éd. Gallimard 1935 の二部に「あとがき」(1934)と共に再録された。本稿では、テキストとして、ガリマール版を使用、一九六七年の改訂版を参照した。表題テキストの抜萃を第II部冒頭に掲げたが、紙数の都合で大幅に割愛せざるをえなかった。尚、本稿中に使用されているローマ数字は原文(配列順)番号を、アラビア数字は訳文(訳出順)番号を表わしている。

II その他の引用作品(著作集のみ)

- (1) *Les rêves et la jambe*, éd. "ca ira", Anvers, 1923.
- (2) *Qui je fus*, éd. Gallimard, 1927.

- (3) *Ecuador*, 1929.
- (4) *La nuit remue*, 1935.
- (5) *Plume, précédé de Loinfain intérieur* (Plume 文庫) 1938.

- (6) *L'espace du dedans* (Pages choisis), 1944
- (7) *Epreuves, exorcismes*, 1945.
- (8) *Ailleurs*, 1948.

- (9) *Passages*, 1950—(Nouvelle édition, 1963)
- (10) *Face aux verrous*, 1954.

- (11) *Connaissance par les gouffres*, 1961.

- (12) *Les grandes épreuves de l'esprit*, 1966.

(訳) édition せなごうせい、たてい、éd. Gallimard p. 80.

III 註

- (1) *Entre centre et absence* p. 37—38, Plume.

- (2) *Il souffle un vent terrible.*

*Ce n'est qu'un petit trou dans ma poitrine. p. 98, Je suis né troué.*

後にシシエー自身『エシマール旅行』(1927. 12—1929. 1) 当時、『心悸亢進(多分神経性の)』に悩まされたこと、一切の冒険が禁じられたことを告白している。(p. 204. Béchon "Mironvux")

また『マンサール』の中で『自分の心臓を《活力のなる》土気の上がらなごうのボンム』(1947) (p. 12) と形

容しており、*ミシヨー*の自己認識が彼の病める心臓一穴を開けられた肉体 (*corps troué*) と密接な関連があることは確かである。

(3) 詩篇「俺たちは」(1932)の次の一節は『わが領土』の詩人の困難な状況を見事に示している。

Mais prendre le vide dans ses mains,  
Chasser le lièvre, rencontrer l'ours.

Couragement frapper l'ours, toucher le rhinocéros.

Etre dépourlé de tout, mis à suer son propre coeur.

Rejeté au désert, obligé d'y refaire son cheptel,

un os par ci une dent par là, plus loin une corne.

Ca c'est pour nous.

p. 85, Nous autres, La nuit remue.

破片 (*un os, une dent, une corne*) から、存在・事物を再創造しようとする試みのうちには、存在の稀薄化を招いた客観世界の空隙を補填しようとする意図が隠されていると言えるかもしれない。しかし、*ミシヨー*には、ロマン主義以降、*ホエジー*の世界から追放され、実利主義的、科学主義的有用性のうちで恥辱に塗れたオプジェを救出しようとする意図はない。その点で、オプジェの復権を意識的に推進した同時代の多くのシュルレアリスト詩人・芸術家たちとは、明確に立場を異にする。たとえば、*ボンジュ*を物の詩人と呼びうるなら、*ミシヨー*を存在の詩人と呼びうるだろう。

(4) たとえば、『夜動く』所収「私の王様」*Mon Roi*や「段階」*Étapes*中の《悪しき神々》はこの世界の拒絶の意志、敵意の象徴である。後者を例にとると、*les dieux mauvais*は《不幸》を取り上げたのを手始めに、次々に詩人の所有を剝奪して行き、最後に

Ils m'ont arraché mes ongles et mes dents.

Ils m'ont donné un œuf à couvrir. p. 48.

(5) p. 94. Vers la sérénité, La nuit remue.

(6) Je me suis bâti sur une colonne absente. p. 99,

Je suis né troué.

(7) たゞ、*『わが領土』*中最も重要なナンメットの「*干渉*」*Intervention*の冒頭部については《*干渉*》(現実界と想像界の力関係の逆転を謀る方法)のナンメットを用いられている。Autrefois, j'avais trop le respect de la nature. Je me mettais devant les choses et les paysages et je les laissais faire. Fini, maintenant j'interviendrais. p. 149, La nuit remue.

(8) *ミシヨー*の想像上の国々への旅行記。著作集『他処』所収の『*シラント・ガマン・リマ*の旅』*Voyage en Grande Garabagne* 1936.『魔法の国』*Au pays de la Magie* 1941.『此処』*ホテ*』*Ici, Poddema* 1948. *レ*その真価が発揮される。

(9) Par hygiène, peut-être, j'ai écrit «mes propriétés» pour ma santé. p. 203, La nuit remue.

(10) p. 54. Panorama de la jeune poésie française. R.

Laffont, 1942.

(11) 註(3) Nous autres は、定冠詞と不定冠詞の対立によって、この三つの特徴が示されている。二、三行目の動物たちは、いずれも定冠詞をとった、類としての、概念としての存在であり、具体的な生きた相貌をもっていない。いわば現実界のカタログの中の生きものであり、詩人の想像界で息づくことはない。一方想像界での詩人の仕事は、不定冠詞を冠った破片を組み立てることである。したがって、定冠詞と不定冠詞の対応が、類型対個別、抽象対具体、間接対直接の対照を示すのである。

(12) p. 104, Mes occupations, Mes propriétés.

(13) 想像力の運動の再遊転の過程は、緊張(怒り)によるエネルギーの供給)から疲労(その喪失)への移行に対応している。

(14) 『夜動く』所収の詩篇「反対」は忿怒の直接的表出の最も成功した例の一つである。

Oh monde, monde étranglé, ventre froid!

Même pas symbole, mais néant, je contre, je contre,  
Je contre et te gave de chiens crevés.

En tonnes, vous m'entendez, en tonnes, je vous  
arracherai ce que vous n'avez refusé en grammes.

p. 84.

(15) p. 152, Passages 引用例は『可能にするための詩』

Poésie pour Pouvoir. Les Cahiers de la Pléiade, 1950

の「あふがき」の一篇の注(Notes sur les malédictions)

(16) martèlement des mots p. 8, Préface d'Épreuves, Exorcismes

(17) 《干渉》は、『力による、牡羊の攻撃による反響』『囚人の真の詩』である《悪魔対局》Exorcisme (préface, ibid) へ、あるいは《可能にするための詩》へと発展していく。註へ参照。

(18) p. 195, Passages. 《私の救いは敵意の中にある。困難なのはそれを保つことである。私は電圧を取戻すために、これは集中しなければならぬ。わが蓄電池 (Mes accus) は最上等の部類に入らぬのだ。》

(19) ennemis sans visage, p. 106. Persécutions, Mes propriétés in La nuit rennue.

(20) p. 117. Colère, ibid.

(21) p. 99—100. Comme pierre dans le puits, plume.

(22) Le vase est clos. p. 7, Préface d'Autheux.

(23) 『ナー』の『je』の特徴は、同一ナント内での作者との距離が必ずしも一定ではなからうことである。この場合、ベノワンの表現を借りれば、『je de critique』の言葉でこれをなす必要はない。『degré zéro de l'imagination』(p. 85, Raymond Bellour, "Henri Michaux ou mesure de l'être") へは言えぬ。

それに反して(A)の《あふがき》三十にならうこと

私はまだ何も持っていない。勿論、私は苛々する。》を本文の最後の文《Vous savez, j'étais bien seul, parfois.》の場合、《Je de confession》(Ibid) なる、現実の作者と重なり合う。

(24) 渦巻→風→空虚の移行は Je suis né troué の次の一節で明らかである。

Il y a impuissance et le vent en est dense,  
Fort comme sont les tourbillons,  
Casseraient une aiguille d'acier,

Et ce n'est qu'un vent, un vide. p. 98.

(25) p. 34, Conseil au sujet de la mer, La nuit remue.

(26) Plume の「あとがき」p. 77 シンローは《私》とは一つの均衡の位置にすぎなく、(Moi n'est qu'une position d'équilibre) と述べ、大略次のように説明している。真の均衡 équilibre (Phase I) は意識的な思考では捉えられないので、結局、思考の動きに応じて、均衡の喪失 pertes d'équilibre (Phase II) と均衡の回復 recouvrements d'équilibre (Phase III) が繰返される。その都度均衡の位置がずれ、別の「私」が現れ出る。(p. 217—p. 218.) シンローのこの反デカルト的ロギク論は彼の肉体に対する意識に根ざしたものであって、決して形而上学的なものではない。

(27) Centre = équilibre (Phase I)  
Bonheur (Mes propriétés) には次のような一節がある。

Venant d'un centre de moi-même si intérieur que je l'ignorais, il met, quoique roulant à une vitesse extrême, il met un temps considérable à se développer jusqu'à mes extrémités. p. 111.

この一節だけからでも、『わが領土』の詩人の立地点とそれに対する詩人の感情(つまり、中心から遠く離れている自分は、幸福には縁遠い存在である)を窺い知ることが出来る。

(28) p. 200. marécage = lieu où s'étendent des marais であり、本文中の marais より広い概念を表すが、その特性に基いて、同義語と見做している。

Voyage en grande Garabagne では、兄弟同志の沼地での死闘の光景が描かれているが、それは次の一節で終る mais sa tête ne put pas se détourner du marécage et s'enfonça irrésistiblement. p. 14, Ailleurs.

(しかし彼(=兄)の頭は泥沼から離れることができず、抗し難く沈んでしまった。)

(尚六七年の改訂版では、※<sub>1</sub>が大字に訂正され、※<sub>2</sub>にカンマが挿入された)

(29) Assaira ses mille fesses infectes... 《彼の多くの不吉な尻を坐らせるだらう》この fesse の語源はラテン語の fissa = fente (裂け目) である。したがって、この箇所は、世界を「裂け目」の内に呑み込もうとする行為を示している。

(30) souffrance と同格に置かれた *pointe atroce* (空想しい尖先→耐え難い瓜先き立ち) は、奈落の淵に巻き込まれまいとする存在の最後の抵抗を表わしている。

(31) シンヨーは、外部から全体的に対象を把握するという物の見方を排除する。彼の視線はいつも銃のチャンに内部に侵入する。

《人間の眼は、彼が見とれている木の葉の緑が何で構成されているかを知ることにはなす》(p. 219, *Postface in Plume*)。また「魔法」*Magie* の中の次の例を見れば、彼の空間の認識方法が、トマンマンの言うように『《Kinesthésique》《Coenesthésique》』であることが首肯される。

Je mets une pomme sur ma table. Puis je me mets dans cette pomme. Quelle tranquillité! p. 9. *Plume*  
Quand j'arrivai dans la pomme, j'étais glacé. p. 10. *ibid*

(32) p. 186, *L'espace, Le corps, La conscience*, Herne, 1966, "Henri Michaux".

(33) 5ページ目の例を挙げれば、*La nuit est un grand espace cubique* (夜は大きな立方体空間である) p. 79, *La vie dans les plies*.

*L'amour, c'est une occupation de l'espace.* (愛は空間の占拠である) p. 23, *Passages*.  
*Dieu est boule.* (神は球体である) p. 110 *Plume*.

(34) 『夢と脚』(単行本として出版されたシンヨーの最初の作品)では、覚醒時には全体人間 *homme entier (total)* の抑圧下にある部分人間 *morceau d'homme* (たとえは脚)が夢の中で目覚め、意識上に立ち現われることが語られていく (*elle (la jambe) ne réfléchit pas comme un homme. Elle réfléchit comme une jambe. p. 11*)。そして、最後に、次のように述べられている。《全体人間は部分人間たちを理解するだらうか。不可避的に。今日でないとしても、明日には。》(p. 26.)

(35) p. 142. *Saint, Mes propriétés in La nuit remue.*

(36) シンヨーの最初の著作集『かくして私である者たち』*Qui je fus* の表題テキストは、皮膚の共同体のうちで様々な要求をいさげつけてくる諸々の《私》に困惑しきって、シンヨーの姿を彷彿とさせるが、それらの母胎をなすのが《部分人間たち》である。

(37) *J'écris pour me parcourir. p. 142. Passages.*

(38) p. 129. *Encore des changements, Mes propriétés.*

(39) p. 110. *Entre ciel et terre, La vie dans les plis.*

(40) p. 108. *La paresse, Mes propriétés.*

(41) p. 46. *Dessins commentés, La unit remue.*

(42) p. 131. *Portrait des Meïdosen, La vie dans les plis.*

(43) p. 130. *ibid.*

(44) *des ailes pures de tout corps p. 206. ibid.*

(67) わが領土あるいは成就されなかった創世記

- (45) p. 68. L'insoumis, Plume.  
(46) L'espace, mais vous ne pouvez concevoir cet horrible en dedans-endehors qu'est le vrai espace. p. 190, L'espace aux ombres, Face aux verrous.  
(47) p. 103. Un chiffon.  
(48) 詩篇「刺し傷の星座」(『襲の中の人生』所収)には「わが領土」とは対極の視点から「肉体(刺し傷の星座)」に幽閉された存在の転落の様子が描かれている。その冒頭部を引用すると、  
L'habitude qui me lie à mes membres tout à coup n'est plus. L'espace s'étend (celui de mon corps?). Il est rond. J'y tombe. Je tombe en bas. Je tombe en haut... (p. 49 La constellation des piqûres, La vie dans les plus.)  
(49) p. 183. Situations-gouttes.  
(50) 後に「グシュー」は「アンション」に次のように述べられている。《私が欲していたのは、最終的に治癒不可能なもの。何かを知るためにできるだけ完全に治癒することである。埋めえないう空虚を知るためにこの空虚を埋めた。》(p. 206, Bréchon, Michaux.)  
(51) p. 127. Dépouillement par espace. メスカリン等の最後の実験報告書である『精神の大試煉』の中で「グシュー」は次のように述べている。《肉体(その器官と機能)が、強者の壮挙によってではなく、弱者、病人、不具者、怪我

人の障碍によってりとわけよく認識され、ヴェールを剥がされたと同様に、精神の混乱とその機能障碍が私の導き手になるだろう。》これは「グシュー」の自己探究が、肉体から精神へ至る道程であり、異常を通じて正常を暴くという同一の方法論に貫ぬかれていることを示している。したがって、『わが領土』から『精神の大試煉』に至る「グシュー」の走行は、根柢においては断絶がなく、結局、精神のメカニスム自体を凝視するという麻薬体験において、『なるもの』は束の間の至福状態でしかなく、正常に戻るとすぐに自我の《複数性》に送り返されてしまうことが確認されたらびである。

(52) Le bain réciproque où l'on est dedans et qui est en soi. p. 181. Situations-gouttes, Connaissance par les gouttes.

(53) 引用箇所の原文は次の通り。  
Le seul habitant sur terre de l'Immatériel, chassé de ses propriétés, sans propriétés, ne se souvenant plus de propriétés. p. 233. ibid. (イタリク筆者)  
多数の《自己標識》(ses repères)を失った「自己の肉体」《それによって生み出される空間》(espace généré par son corps)の限定をうけなくなると、人は「真の形而上学的人間」(véritable homme métaphysique)に変貌する。  
(国学院大学専任講師)(一橋大学講師)